

北海道医報

今月号から本誌の装丁をリニューアルした。遅ればせながら、B5版からA4版に変更し活字を大きくした。掲載記事の内容を見直して読者の要望に応えていきたい。第1号を昭和35(1960)年1月1日に発行してから、第1051号目にあたる。月2回発行の時代を経て、平成15(2003)年4月の第1015号からは、月1回の発行としている。

題字は、松本春子氏〔当会第6代会長松本剛太郎(昭和30～40年)のご令室-書家〕の筆によるもので、伝統を守りたい。表紙の写真は、本号は北海道医師会館の全景を使用した。次号からは従来のように会員の投稿写真を採用するつもりだ。いつもながら、ここに使わせてもらっている写真は素晴らしい。撮影者のロマンと技術の高さが伺える。これからも多くの投稿写真を欲しい。

I T化の波は本誌にも例外ではない。月1回の発行とした第1015号からは、広告以外の全ページをP D Fファイルにして当会ホームページに掲載するようにした。本号からは「医療保険関係通知」も同様に掲載する。いつでも、バックナンバーを読むというより「見る」ことができるようになり、サイト内検索も可能になっている。ホームページにはその他の重要情報も即時掲載している。ご活用いただきたい。一方、本誌を専用ファイルに大切に保存されている会員も多いとのこと。この時代だからこそ貴重であり、編集責任者として感謝に堪えない。

医療への逆風が吹き荒れ、医療制度が都道府県単位で再編されようとしている中、会内はもとより会外向けの広報活動がますます重要になっている。先月、札幌市医師会で講演された李啓充先生は、会場からの質問に答えて、「医師会が発する正論を国民に理解され支持されるためには、医師会の劇的なイメージアップが不可欠である」という趣旨のことを話されていた。まったく同感である。医師会広報の方法論の変更だけでは、自己満足で終わるだろう。当会の広報活動にも劇的な変化が求められている。



本号が会員の手元に届くころには、日本医師会の新執行部が誕生している。日本医師会が名実ともに存在価値のある学術集団として、全国の医師と医療団体の最終的な窓口として生き残ることができるかは、その双肩にかかっている。

激しい選挙戦ではあったが、全国の医師会と会員が、選挙後はノーサイドの精神で日本の医療のために一致団結してほしい。